

## 低反応レベルレーザー治療 (LLL T) が胚発生へ与える影響

◎八百 麻衣子<sup>1)</sup> 松澤 三奈<sup>1)</sup> 松本 寛史<sup>1)</sup> 井田 守<sup>1)</sup> 福田 愛作<sup>1)</sup>  
森本 義晴<sup>2)</sup>

1) I V F 大阪クリニック 2) H O R A C グランフロント大阪クリニック

### 目的

当院では生殖医療における統合医療を推進し、補助治療として低反応レベルレーザー治療 (LLL T) を導入している。当院で補助治療を受ける患者の最大の関心事は胚質の改善にある。しかし不妊治療を進めて行く過程では、治療法の変更や採卵における刺激法の変更、胚培養期間の変更があり、補助治療施行前後の胚質の変化に対する客観的な評価は難しい。患者が前向きに補助治療に取り組む為にも治療効果について正確な情報を伝える事は有益である。今回 L L L T の胚質への影響を同一の患者について、治療法、刺激法、胚培養期間を考慮し客観的に評価した。

### 方法

2011~2018 年に L L L T を受けた患者を対象とした。同一患者で同一刺激 (自然周期、刺激周期) 同一培養期間について L L L T 施行前後の採卵周期において採卵後 3 日目の移植可能胚率、5 日目の胚盤胞率・良好胚盤胞率を自然周期 (n=85)、刺激周期 (n=64) それぞれについて比較検討した。

### 結果

自然周期で採卵を行った患者の 3 日目移植可能胚率・5 日目胚盤胞率・良好胚盤胞率は L L L T 前後でそれぞれ 68.8% vs 81.6% (p<0.05)、48.9% vs 66.0% (p=0.09)、15.6% vs 28% (p=0.14) であった。

刺激周期では 3 日目移植可能胚率・5 日目胚盤胞率・良好胚盤胞率はそれぞれ 54.9% vs 64.9% (p<0.01)、48.7% vs 56.9% (p<0.05)、19.6% vs 24.6% (p=0.14) であった。

### 考察

自然周期・刺激周期ともに、L L L T 施行により分割期胚移植可能胚率・胚盤胞率・良好胚盤胞率が改善傾向にあり、L L L T は胚質の改善に有効であると考えられる。また胚質に対する悪影響はないと考えられた。このような具体的な有効性情報の提示は、患者が L L L T に積極的に取り組むモチベーションに繋がると考える。